

チャプレン室のボランティアセンター ～「建学の精神」を具体的に伝える機会の提供を～

藤原 芳行

2003年に設立された現在の立教大学ボランティアセンターの前身として、1993年から10年にわたって展開された、大学チャプレン室におけるボランティアセンターの活動がある。

1990年代の初頭は、ボランティア活動に対する社会的な関心が高まっていた時代で、学内的には教職課程で「特別活動に関する科目」が必修化され、それに対応した「ボランティア・コース」が設置されている。

これらの状況を受けて、学内教職員「有志」の働きかけにより、他大学のボランティア支援の状況調査なども行われ、1993年度からチャプレン室の活動の一環として、ボランティアセンターが設置されることになった。チャプレン室にボランティアセンターが設置されたのは、ボランティアと立教建学の精神との深いつながりが意識されてのことで、当時の部長会や事務部長会への提案資料には、その目的として、「建学の精神を具体的に伝える機会を提供する」と謳われている。

チャプレン室ボランティアセンター(以下、ボランティアセンター)は、豊島区や東京都・埼玉県の社会福祉協議会や、教務部・学生部などをはじめとする学内各部局、校友会レディスクラブなどでおこなわれていたボランティア関連の諸活動と連携を取りつつ、その活動を展開していった。

ボランティア情報の収集・紹介・コーディネート、立教固有のボランティア受け入れ先の開拓、点字・手話・介助実習などの講習会の実施、ボランティア保険の仲介など、ボランティアセンターとしての主要な機能は当初から備えられていた。なお、点字の講習会については、それまで学生部の課外教育プログラムとして実績を積んでいたプログラムがチャプレン室に移管されたものである。

そして、ボランティア元年といわれる1995年の阪神・淡路大震災、続く1997年のナホトカ号重油流出事故などへの学生ボランティアの支援を通して、ボランティアセンターは着実に実力をつけていったということができよう。

阪神・淡路大震災における立教大学の学生によるボランティア活動は、教職員有志の呼びかけに約240名の学生が応じ、学生自らが「阪神・淡路大震災連絡会事務局」を結成して、現地の聖公会の教会を拠点として、手探りながら主体的に被災地の救援活動にかかわった。

1998年の「コミュニティ福祉学部」「観光学部」の新座キャンパスでの開設は、ボランティアセンターの新たな展開の契機となった。ボランティアセンターは、学生の「成長支援のセンター」として、より専門的・包括的な機能が期待されるようになった。建学の精神とのかかわりは保ちつつも、対外的なアピールや専門スタッフの必要性などの観点から、チャプレン室からは独立した組織としてのボランティアセンターが構想されるようになり、2003年度の「立教大学ボランティアセンター」の設立へとつながっていくことになる。

(学院人事部副部長 1994年度～1999年度 チャプレン室事務課勤務)